

「カタジケナシ」考(その四)

この小誌に形容詞カタジケナシについて書き始めてこれで四回目になる。(注1)すなわち、まず初めにカタジケナシの意味用法の変遷について述べ、続いて類義語カシコシとの比較考察を行った。そして、三回目の前号では、もう一つの類義語アリガタシを取り挙げ、カタジケナシと比べる形で通時的にながめて来た。

それではここで、これまでの内容を簡単に振り返ってみることにしよう。初めに、カタジケナシ、カシコシ、アリガタシという三つの形容詞の意味は、それぞれ左のようなものであった。

カタジケナシ

①顔が醜い

②恥ずかしい、みっともない

カシコシ

③おそれ多い、申しわけない
④ありがたい、うれしい

①おそろしい、おそれるべきだ

②おそれ多い、申しわけない

③ありがたい、うれしい

④賢い、性質や能力がまさっている

⑤都合がよい、幸いだ

⑥非常に、甚しく(連用形の用法)

アリガタシ

①ありそうもない、稀だ

②困難だ、難しい

③生きることが難しい、暮らしていく

我妻多賀子

④めったにないほど優れている

⑤またとなく尊い、おそれ多い

⑥感謝したい気持ちである、もったいない、うれ

しい

右のうち、お互いに意味的関連が認められるのは二系列ある。すなわち一つは、カタジケナシの③、カシコシの②、アリガタシの⑤で、これらはいずれも「おそれ多い」の意味を有する。もう一つは、カタジケナシの④、カシコシの③、アリガタシの⑥で、こちらは「ありがたい、もったいない、うれしい」と訳すことができる。

ただ、同じ「おそれ多い」や「ありがたい、うれしい」でも、この三つの形容詞には微妙なニュアンスの相違がある。すなわち「おそれ多い」の場合、カタジケナシでは、「顔が醜い」とか「恥ずかしい」という本来の意味が影響して、対象物の前で自らの卑小さを恥じる面が多分に含まれている。それに対して、カシコシはもともと精霊崇拜の観念を表す語だったので、対象物を絶対のものとしてあがめ、その前でただひたすら恐れおののきかしてまわっている気持が強い。そしてアリガタシは、これも原義の「ありそうもない、稀だ」からわかるように、対象物がこの世にありそうもなく類稀で、ことのはかにすぐれていると思うことから出て来た語なので、深い尊

敬の念が感じられる。

以上、同じ「おそれ多い」でも、これら三つは少しずつ違っていて、畏敬・畏怖の度合から見ると、カシコシが最も強く、カタジケナシ、アリガタシがそれに続くものと思われる。

次に「ありがたい、うれしい」の場合は、畏怖・尊敬の念を抱いていた対象物が自分の身にまで影響を及ぼすようになり、「申しわけないほどありがたい、身に余るほど光栄でうれしい」と意味が変じたものである。そして、この三つの形容詞では、カタジケナシ、カシコシに遠慮してかきこまる気持がいくらか含まれているが、アリガタシには、手放しでよろこび、純粹に心からの感謝の気持を表している意味合いが強い。よって、感謝の度合からいうと、アリガタシ、カタジケナシ、カシコシの順にでもなるであろうか。

さてここで、この「おそれ多い」そして「ありがたい、うれしい」の意味を有する形容詞が、量的にどれくらい出て来たかを通時的に再度ながめてみることにしよう。今、上代から近世までの主要な十作品を任意抽出し、二つの意味について、カタジケナシ、カシコシ、アリガタシがそれぞれ何例ずつ使われていたかを表示してみると左のようになる。

作品名	意味									
	カ タ ジ ケ ナ シ	カ シ コ シ	ア リ ガ タ シ	カ タ ジ ケ ナ シ	カ シ コ シ	ア リ ガ タ シ	カ タ ジ ケ ナ シ	カ シ コ シ	ア リ ガ タ シ	カ シ コ シ
万葉集	0	1	5	0	22	3	13	100	22	0
宇津保物語	1	0	1	3	2	6	8	38	80	53
源氏物語	7	1	3	6	8	4	2	26	14	0
大鏡	1	8	2	0	8	1	2	31	10	0
宇治拾遺物語	0	0	0	0	0	0	0	17	20	1
平家物語	12	3	0	0	0	0	0	0	0	0
徒然草										
天草本平家物語										
昨日は今日の物語										
浮世床										

右の表のカタジケナシのところを見ると、時代が経つにつれ、「おそれ多い」でも、また「ありがたい、うれしい」でも用例数が減って来ている。これは参考とした作品において余りこの語を用いることがなかったためであろう。次にカシコシは、中古以降「ありがたい、うれしい」の意味ではほとんど出て来ないし、「おそれ多い」の意味のものも、後世になるほど量が減少して来ている。

これはつまり、カシコシが、時代と共に④の「賢い、性質や能力がまさっている」の意味でのみ用いら

れるようになって来たためである。アリガタシは、「おそれ多い」の意味の場合には、時代的に平均して用いられていて問題がない。もう一つの「ありがたい、うれしい」の義は、前号で述べたように、近世になって確立したものと思われる。そしてこれは、現代でも盛んに耳にすることができるので、多分近世の諸作品でも、大いに使われていたのではないだろうか。

ところで、この小稿では、形容詞カタジケナシについて考えてみようとしているので、「賢い、性質や能力がまさっている」の意味で独自に動き出したカシコシに関しては、ひとまず保留し、アリガタシとカタジケナシの関係について、もっと深く追究してみることにはしたい。

この両語については、一通り前号で通時的にながめて来たが、中世末から近世にかけては、資料不足も手伝いどうも不明なところが多かった。そこで今号では、この時期の資料に出来る限り当たり、いくつかの疑問点を解明して行くことにしよう。以下、「一、通時的考察」「二、類義語との比較考察」につづき、章を改めて述べて行くことにする。

三、カタジケナシとアリガタシ

先に掲げた表を見ると、「おそれ多い」の意味ではカ

タジケナシもアリガタシも、中世以降平均して使われているように見えるが、果たして作品のジャンルなどに關係なくずっと使われ続けていたものであろうか？

また、いわゆる「ありがたい、うれしい」という意味のお礼の言葉アリガタシが、近世になって確立したとすると、それによってカタジケナシとの間に何らかの使い分けが生じたのであろうか？

さらに、現在ではあらたまつた丁寧な言い方の時にはカタジケナシを用いるので、アリガタシに比べてカタジケナシの方がより敬意度が高いと考えられるが、やはり當時もそうであったのだろうか？

以上のような諸点について明らかにすべく、以下カタジケナシ、アリガタシの意味用法をながめて行くことにする。まず初めに、今回目を通してみた作品の中にカタジケナシとアリガタシが、それぞれ何例使われていたかを意味別に下に表示してみることにしたい。

今号は中世末からということで、ひとまず一五世紀半ばに成つた「増鏡」を上限とし、以下一八一三年刊行の「浮世床」まで、参考にした作品をほぼ成立年代順に並べた。尚、各形容詞の意味は先述した番号にしたがった。

また、すでにこれまでの号で調査済みの作品には※印を付した。(注2)

西暦	作品名	カタジケナシ													アリガタシ																																																																																																																																						
一四二〇	申楽談儀鏡	※増	3	1	0	3	3	1	5	5	1	20	1	2	1	2	0	0	5	64	3	16	③	22	8	0	0	2	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	6	④	25	9	0	3	5	1	7	6	1	20	1	2	1	2	0	0	7	64	3	22	計	4	0	1	0	0	0	4	0	0	8	1	0	0	0	0	2	2	8	1	7	①	2	1	0	0	2	0	3	0	1	22	6	0	0	6	2	0	4	190	4	8	⑤	0	3	0	0	0	0	0	0	0	7	0	0	0	3	0	0	0	18	3	0	⑥	6	4	1	0	2	0	8	0	1	39	8	0	0	9	2	2	6	216	9	15	計
一四六三	義経記	※義経記	3	1	0	3	3	1	5	5	1	20	1	2	1	2	0	0	5	64	3	16	③	22	8	0	0	2	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	6	④	25	9	0	3	5	1	7	6	1	20	1	2	1	2	0	0	7	64	3	22	計	4	0	1	0	0	0	4	0	0	8	1	0	0	0	0	2	2	8	1	7	①	2	1	0	0	2	0	3	0	1	22	6	0	0	6	2	0	4	190	4	8	⑤	0	3	0	0	0	0	0	0	0	7	0	0	0	3	0	0	0	18	3	0	⑥	6	4	1	0	2	0	8	0	1	39	8	0	0	9	2	2	6	216	9	15	計
一四七七	史記抄	史記抄	3	1	0	3	3	1	5	5	1	20	1	2	1	2	0	0	5	64	3	16	③	22	8	0	0	2	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	6	④	25	9	0	3	5	1	7	6	1	20	1	2	1	2	0	0	7	64	3	22	計	4	0	1	0	0	0	4	0	0	8	1	0	0	0	0	2	2	8	1	7	①	2	1	0	0	2	0	3	0	1	22	6	0	0	6	2	0	4	190	4	8	⑤	0	3	0	0	0	0	0	0	0	7	0	0	0	3	0	0	0	18	3	0	⑥	6	4	1	0	2	0	8	0	1	39	8	0	0	9	2	2	6	216	9	15	計
一五二八	閑吟集	閑吟集	3	1	0	3	3	1	5	5	1	20	1	2	1	2	0	0	5	64	3	16	③	22	8	0	0	2	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	6	④	25	9	0	3	5	1	7	6	1	20	1	2	1	2	0	0	7	64	3	22	計	4	0	1	0	0	0	4	0	0	8	1	0	0	0	0	2	2	8	1	7	①	2	1	0	0	2	0	3	0	1	22	6	0	0	6	2	0	4	190	4	8	⑤	0	3	0	0	0	0	0	0	0	7	0	0	0	3	0	0	0	18	3	0	⑥	6	4	1	0	2	0	8	0	1	39	8	0	0	9	2	2	6	216	9	15	計
一五三二	中華若木詩抄	中華若木詩抄	3	1	0	3	3	1	5	5	1	20	1	2	1	2	0	0	5	64	3	16	③	22	8	0	0	2	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	6	④	25	9	0	3	5	1	7	6	1	20	1	2	1	2	0	0	7	64	3	22	計	4	0	1	0	0	0	4	0	0	8	1	0	0	0	0	2	2	8	1	7	①	2	1	0	0	2	0	3	0	1	22	6	0	0	6	2	0	4	190	4	8	⑤	0	3	0	0	0	0	0	0	0	7	0	0	0	3	0	0	0	18	3	0	⑥	6	4	1	0	2	0	8	0	1	39	8	0	0	9	2	2	6	216	9	15	計
一五三三	四河入海	四河入海	3	1	0	3	3	1	5	5	1	20	1	2	1	2	0	0	5	64	3	16	③	22	8	0	0	2	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	6	④	25	9	0	3	5	1	7	6	1	20	1	2	1	2	0	0	7	64	3	22	計	4	0	1	0	0	0	4	0	0	8	1	0	0	0	0	2	2	8	1	7	①	2	1	0	0	2	0	3	0	1	22	6	0	0	6	2	0	4	190	4	8	⑤	0	3	0	0	0	0	0	0	0	7	0	0	0	3	0	0	0	18	3	0	⑥	6	4	1	0	2	0	8	0	1	39	8	0	0	9	2	2	6	216	9	15	計
一五三九	どりのなまりしたん	どりのなまりしたん	3	1	0	3	3	1	5	5	1	20	1	2	1	2	0	0	5	64	3	16	③	22	8	0	0	2	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	6	④	25	9	0	3	5	1	7	6	1	20	1	2	1	2	0	0	7	64	3	22	計	4	0	1	0	0	0	4	0	0	8	1	0	0	0	0	2	2	8	1	7	①	2	1	0	0	2	0	3	0	1	22	6	0	0	6	2	0	4	190	4	8	⑤	0	3	0	0	0	0	0	0	0	7	0	0	0	3	0	0	0	18	3	0	⑥	6	4	1	0	2	0	8	0	1	39	8	0	0	9	2	2	6	216	9	15	計
一五九二	イソボのハブラス	イソボのハブラス	3	1	0	3	3	1	5	5	1	20	1	2	1	2	0	0	5	64	3	16	③	22	8	0	0	2	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	6	④	25	9	0	3	5	1	7	6	1	20	1	2	1	2	0	0	7	64	3	22	計	4	0	1	0	0	0	4	0	0	8	1	0	0	0	0	2	2	8	1	7	①	2	1	0	0	2	0	3	0	1	22	6	0	0	6	2	0	4	190	4	8	⑤	0	3	0	0	0	0	0	0	0	7	0	0	0	3	0	0	0	18	3	0	⑥	6	4	1	0	2	0	8	0	1	39	8	0	0	9	2	2	6	216	9	15	計
一五九三	ばつちずもの授けやう	ばつちずもの授けやう	3	1	0	3	3	1	5	5	1	20	1	2	1	2	0	0	5	64	3	16	③	22	8	0	0	2	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	6	④	25	9	0	3	5	1	7	6	1	20	1	2	1	2	0	0	7	64	3	22	計	4	0	1	0	0	0	4	0	0	8	1	0	0	0	0	2	2	8	1	7	①	2	1	0	0	2	0	3	0	1	22	6	0	0	6	2	0	4	190	4	8	⑤	0	3	0	0	0	0	0	0	0	7	0	0	0	3	0	0	0	18	3	0	⑥	6	4	1	0	2	0	8	0	1	39	8	0	0	9	2	2	6	216	9	15	計
一五九六	おらしよの翻訳	おらしよの翻訳	3	1	0	3	3	1	5	5	1	20	1	2	1	2	0	0	5	64	3	16	③	22	8	0	0	2	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	6	④	25	9	0	3	5	1	7	6	1	20	1	2	1	2	0	0	7	64	3	22	計	4	0	1	0	0	0	4	0	0	8	1	0	0	0	0	2	2	8	1	7	①	2	1	0	0	2	0	3	0	1	22	6	0	0	6	2	0	4	190	4	8	⑤	0	3	0	0	0	0	0	0	0	7	0	0	0	3	0	0	0	18	3	0	⑥	6	4	1	0	2	0	8	0	1	39	8	0	0	9	2	2	6	216	9	15	計
一六〇〇	理慶尼の記	理慶尼の記	3	1	0	3	3	1	5	5	1	20	1	2	1	2	0	0	5	64	3	16	③	22	8	0	0	2	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	6	④	25	9	0	3	5	1	7	6	1	20	1	2	1	2	0	0	7	64	3	22	計	4	0	1	0	0	0	4	0	0	8	1	0	0	0	0	2	2	8	1	7	①	2	1	0	0	2	0	3	0	1	22	6	0	0	6	2	0	4	190	4	8	⑤	0	3	0	0	0	0	0	0	0	7	0	0	0	3	0	0	0	18	3	0	⑥	6	4	1	0	2	0	8	0	1	39	8	0	0	9	2	2	6	216	9	15	計
一六三二	三河物語	※昨日は今日の物語	3	1	0	3	3	1	5	5	1	20	1	2	1	2	0	0	5	64	3	16	③	22	8	0	0	2	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	6	④	25	9	0	3	5	1	7	6	1	20	1	2	1	2	0	0	7	64	3	22	計	4	0	1	0	0	0	4	0	0	8	1	0	0	0	0	2	2	8	1	7	①	2	1	0	0	2	0	3	0	1	22	6	0	0	6	2	0	4	190	4	8	⑤	0	3	0	0	0	0	0	0	0	7	0	0	0	3	0	0	0	18	3	0	⑥	6	4	1	0	2	0	8	0	1	39	8	0	0	9	2	2	6	216	9	15	計

	一六三	一六四	一六八	一六八	一六九	一六九	一七〇	一七五	一七八	一八〇	一八三	計				
	醒	夷大	好色一代男	※雑兵物語	好色五人女	日本永代蔵	世間胸算用	奥の細道	曾根崎心中	三冊子	国性爺合戦	遊子方言他	雨月物語	敵討義女英雄	東海道中膝栗毛	※浮世床
173	1	20	5	0	0	0	0	0	1	1	0	173	0	2	0	2
227	4	153	6	0	3	1	2	0	1	0	1	227	1	6	0	2
400	5	173	11	0	3	1	2	0	2	0	5	400	1	8	0	4
43	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	43	0	0	0	1
298	0	17	5	0	1	4	2	0	2	0	3	298	7	4	3	1
166	3	38	5	1	1	1	0	1	0	1	11	166	12	47	11	0
512	5	57	10	1	2	5	2	1	2	1	14	512	19	51	14	1

右の表に掲げた作品以外に、今回一通り参照した文献を列挙してみると、連歌関係で「十問最秘抄」「歌林良材集」「連歌初学抄」「水無瀬三吟百韻」「新撰蒐玖波集」、また、抄物の「周易抄」「毛詩抄」「蒙求抄」、

俳句・俳文関係で「貝おほひ」「野ざらし紀行」「笈の小文」「更科紀行」「去来抄」、その他「おあん物語」「おきく物語」、仮名草子の「身の鏡」などがある。つまり、これらの作品にはカタジケナシもアリガタシも全く使われていなかったことになる。

それでは、用例の見られた作品で、実際にカタジケナシ、アリガタシがどのように使用されていたかを見て行くことにしたい。

まず初めに、表を元に全体をまとめてジャンル別に見ると、抄物には、どちらかというとアリガタシが多い。これは文体の上の特徴と考えられる。次に、キリシタン関係の資料では、カタジケナシがよく使われているが、これは意味内容の面から納得できる。それから「高砂」「小督」「代王」など謡曲にはアリガタシの例の方が多く、「夷大黒」「朝比奈」など狂言（虎明本）ではカタジケナシが圧倒的に大量に用いられている。これについては後述するが、多分それぞれの本の特色が出ているのである。（注3）さらに、近世末の黄表紙、滑稽本あたりになると、アリガタシが圧倒的に増えて来るが、これはいわゆるお礼の言葉アリガタシの確立と普及を物語っていることになろう。

その他、作品によっては、格別にカタジケナシが多か

ったり、反対にアリガタシの方がより多量に用いられているものもあるが、これについては各作品の特徴によるものと推測するにとどめ、今、ここでは、これ以上言及することを避けたい。

続いて、使用場所の点から見ると、カタジケナシ、アリガタシのいずれも、地の文、会話、心内語などに自由に用いられている。歌の例は共に少ないが、これは音数などが影響しているのであろう。要するに、使用場所による使い分けはこの両語には存在しなかったと言ってしまうさそうである。

さて、それでは、意味・用法の上から、これら二語についてその相違を探ってみることにしよう。まず、表でも明らかのように、カタジケナシが原義から派生した二つの意味でしか使われていないのに対し、アリガタシの方は、まだ元の意味の「ありそうもない、稀だ」でも何例か出て来ている。

○いかなる龍田姫の錦もかゝる類はありがたくこそ見
え待けれ。
(増鏡・第六)

○昔は聞きつ。近き世には有難かりける御事かな。
(謡曲・龍虎)

○誇りかに思ふ事なき人の中にはひとりとしてもあり
難かるべしとなり。
(ささめごと)

○計略の深き物語、昔も今もありがたきことなり。

(御伽草子・あきみち)

○ゑひぐわをきわめ。世をたもちたまふ事。またたぐ
ひありかたく。御いたわしや。
(理慶尼の記)

○土屋惣蔵が有様、せうこもいまも有(り)がたしとほ
めぬ者ハなし。
(三河物語・巻三)

○是皆当社の御神にしくはなし。有難かりしためしな
りとのつとうを申おさめて……

(狂言・祝詞神楽)

○「モシヘ丁は天氣がよくてい、がどふも中洲はふり
んすヨ」トいひしはありがたき語なりト云々。

(洒落本・傾城買四十八手)

以上、「ありそうもない、稀だ」の義を有するアリガ
タシは、用例数が少なくなつたとはいえ、まだこの時期
すっかり消滅してはいなかったことになる。これは先号
でも記したが、「日葡辞書」や「倭訓栞」などの辞書に
この意味を載せていることから判断されよう。

もう一つ、表には載せなかつたが、「困難だ、難しい」
の意味のアリガタシも左のように四例使われている。
(注4)

○抑能批判と云に人の好みまち／＼也。然者万人の心
に合はん事左右なくありがたし。

(世阿彌伝書・花鏡)

○身一人楠木を離れて功をなす事有(り)がたし。

(御伽草子・三人法師)

○此尉をばおうぢと申し、おうぢならでは御頼みあり

がたく候程に……

(御伽草子・三人法師)

○來テ信宿シテ雜談セヨ隱居ハ治定也又見コトモアリ

カタシ。

(四河入海・一五ノ一)

ただし、近世の作品になると、この「困難だ、難しい」の意味は出て来ない。いづれにしる、右の例などから、アリガタシがカタジケナシに比べて用法範囲が広く、かつ多義にわたっていたことがわかる。それでは続いて、カタジケナシ、アリガタシの双方に共通して見られる意味についてながめてみよう。

初めに「おそれ多い」であるが、これは表ではカタジケナシの③、アリガタシの⑤に当たる。この意味は神や仏、またはそれに関するものに対して使われた場合が最も多いが、左に記す例のように、カタジケナシ、アリガタシの両方に隔てなく用いられている。

○忝くも天照太神皇孫を蘆原の中つ国の御主と定め給

はんとありしに……

(謡曲・水無月校)

○かたじけなくも帝釋天王は天降り給ひ……

(御伽草子・七草草紙)

○かへってかたじけなきでうすの御恩なりとおもひとりて……
(ばうちずもの授けやう)

○東照権現はかたじけなくもみち山にあがめ奉り……

(三河物語・卷三)

○忝くも法然上人よりつたはったじゅずじや程にいた

だかせて弟子にせう

(狂言・宗論)

○ありがたや佛舍利の御寺ぞ在世なりける

(謡曲・舍利)

○即ち天道の告かとありがたくて内にて太刀をおさめ
待ちにけり。

(御伽草子・あきみち)

○「今ほどありがたひ説法は有まひぞ」といふ。

(狂言・魚説經)

○都よりあまたの番匠をまねきて宝塔を建立、有難き

御利生なり

(日本永代蔵・卷一)

○天照神の威徳ぞ有りがたき

(国性爺合戦)

また、「おそれ多い」が、神、仏以外に人に対して用いられた例があるが、その人はもちろんきわめて身分の高い者に限られる。そして、これまた左に記すように、カタジケナシにもアリガタシにも用例が見えている。

○かたじけなくも殿下殿の御子に二位の中將殿と申し

て並ぶ方なき御人なり。(御伽草子・文正さうし)

○右ノ詩ハ大唐ノ天子ノ和韵也、忝キ事也。

(中華若木詩抄・中)

○かたじけなくも延喜の御門の臣下にしへいのおとゞ、
かんせうじやう、はん大納言…(狂言・右流左止)

○カ、ルアリカタイ君ニテワタラセタマウトテ…

(史記抄・三)

○天子ノ御恩ソアリカタイ事カナトテ…

(四河入海・三ノ二)

○お年若じやがありがたい殿様じや。

(黄表紙・孔子編千時藍染)

次に、この意味の場合、一緒に用いられている形容詞は余りなかったが、ただ「尊し」との併用例が出て来た。

しかし、これも左に記すように、カタジケナシ、アリガタシの両方に見えている。

○女の弁才天女様は忝なくも尊くも京都千本通中立賣
ひょいと上ル所、邊栗屋与太九郎さまの相方じや。

(東海道中膝栗毛・五編追加)

○やがて御堂へ参り御覽ずるにまことにたつとくあり
がたき心ちして…(御伽草子・文正さうし)

以上述べて来た限りでは、「おそれ多い」の意味の場合、カタジケナシ、アリガタシの間に、特にこれと言った使い分けはないように思われる。だが、ここで一寸注目したいのは、カタジケナシの方の語形である。すなわ

ち、右に挙げたいいくつかの例文でわかるように、カタジケナシはほとんどカタジケナクモという形で出て来る。どの作品でもこれが目立つが、今仮に、用例数の多い謡曲で数えてみると、カタジケナシ六一例中、半分以上の三五例までがカタジケナクモとして使われている。一方アリカタシの方は、一七六例のうちアリガタクモはたったの一例、最も多いのはアリガタヤで、八一例にまで及んでいる。アリガタヤは言い切りの感動的表現で、神、仏、貴人などに対して用いられると「おそれ多いことよ」となるが、そこには自分自身の感謝の気持ちも多分に含まれている。ところが、カタジケナクモはそこで一呼吸置き、あとに続くものに対してかしまるといふ、畏怖、畏敬の念がとて強い。

要するにこれは、カタジケナシ、アリガタシの形容詞それ自体に、右に記したような意味合いが含まれているので、必然的に語形にも量の多少が見られるのであろう。つまり、カタジケナシが純粹に「おそれ多い」の意を表すのに対し、アリガタシには、次の「ありがたい、うれしい」の意味に移行する気配が濃厚に感じられる。カタジケナシが純然とした畏敬の念を表すことは、左に記すように、「かけまくも」と共に用いられた例が出て来るところからも判断される。上代から既に見られるこの用

法は、まさにカタジケナシ独特のものであり、アリガタシがこれに取つて代わることはまずあり得ないのである。

○さるにても我が子の失はれんとしけるとは聞けどもなをやさりともの頼みかけまくもかたじけなくも蔭

頼む南無や大悲の観世音 (世阿弥伝書・五音)

○其時大勢おり重なつて千筋の繩をかけまくもかたじけなくも君の御前に追つて行くこそめでたけれ。

(謡曲・夜討曾我)

○ただ頼めかけまくもかたじけなしやこの神の恵みも鹿島野の草葉に置ける露の間も

(閑吟集・二四六)

さて次に、「ありがたい、うれしい」の義に分類したカタジケナシの④、アリガタシの⑥について見て行くことにしよう。まず初めに、アリガタシの場合、この意味は近世になって確立した旨先に述べたが、今回改めて調査した結果、中世末の作品でも、後に記すように、どうしても「ありがたい、うれしい」の意に訳した方がいい例が出て来たので、その旨断つておく。それでは最初にこの意味が何に對して用いられているかを見ると、「おそれ多い」の時のように、必ずしもその対象は明確でなく、カタジケナシ、アリガタシいずれにおいても、きわめて千差万別といえる。また、併用される形容詞は、ま

ず皆無にひとしく、カタジケナシ、アリガタシとも、ほとんど単独で用いられている。ただ、形容詞ではないがこの意味の場合、よく伴われる語として、情、心ざし、心づかひ、心入などの語が挙げられる。だが、これも左の例のように、カタジケナシ、アリガタシの双方に見えてい

る。
○まことに御心つかひかたしけなひ、其所はまかせをかれよと申。(昨日は今日の物語・下)

○勝頼之御なさけ忝(け)なくて御供申(す)にあらばこそ……(情)(三河物語・卷三)

○法師横手をうって「是はかたじけなき御心ざしや」と……(好色五人女・卷五)

○「いまだおなじみもなきうちに御心入の程はかたじけなし。(日本永代蔵・卷六)

○「イヤお心ざしは忝いがサア弥次さんいかふ。(東海道中膝栗毛・三編上)

○御志ありがたう候へ。(謡曲・安達原)

○「御心ざしのありがたさをそれがしも給はらん」と(御伽草子・酒吞童子)

○「さてもくそれにつけてもこれまでお下りあった志こそありがたい事じゃ。(天草本平家物語・巻第四)

○「お心ざし有難ふござる」
(狂言・路れん)

○夫の心はしらねども母の情の有りがたさ。

(国性爺合戦)

ところで、この意味群の中には、相手の行為に対して敬意や謝意を表すいわゆるお礼の言葉が含まれる。例えばカタジケナシの場合、それは左のように使われている。

○「そなた達ほどきさくなかひてはなひほどにみやげ(土産)をおまらせう。(買手)

「それはかたじけなひ。是へくだされひ。」

(狂言・目近籠骨)

右の例は、売手が「土産をさし上げよう」と呼びかけたのに対し、太郎冠者と次郎冠者が「それはありがたい」と感謝の言葉を述べている場面で、ここは明らかにお礼の言葉といえる。狂言の虎明本ではこの種の語が非常に多く、カタジケナシの④が一五三例あるうち一三一例までを占めている。ところが、これが一五〇年後の虎寛本

になると、ほとんどアリガタシに代わっている。(注5)

虎明本の成立一六四二年というのは、いわば書写された年代なので、この本には、室町時代の上方語などいろいろ反映していると思われる。よって、中世末期には、お礼の言葉カタジケナシが行われていたことは、まずまちがいないであろう。

一方、アリガタシのお礼の言葉としては、左のような例がある。

○「今宵の御宿かへすくも有難うこそ候へ。」

(謡曲・安達原)

右は、廻国行脚に赴いた那智の東光坊祐慶が、陸奥の安達原に着き、老女に一夜の宿を乞うている場面である。

宿泊を許された祐慶の発した言葉が、ここに引用した文であるが、これは明らかに「ありがたい、うれしい」という感謝の気持ちのこもった意味にとるべきであろう。

このような例が謡曲にまだいくつも見られるので、お礼の言葉のアリガタシは、中世末にも決して使われていなかったわけではないといえる。

右のように、近世以前にもその存在が認められるお礼の言葉カタジケナシ、アリガタシは、その後も、左に記す通り、その使用例が続出している。

○「殊之外御チソウ忝(く)奉レ存候。」

(三河物語・巻一)

○「正月の入用御無心の書簡はいしまいらせ時分がら忝存候。」
(好色一代男・巻七)

○「これははやくとかたじけない。」

(洒落本・錦之裏)

○「大願成就かたじけない。」

○「是はありがたふぞんじます。」
(東海道中膝栗毛・六編上)

(洒落本・辰巳之園)

○「春にでもなつて下らっしゃい」「ありがたふござりまする。」
(黄表紙・敵討義女英)

○「コリヤありがたうござります。」
(東海道中膝栗毛・五編上)

(東海道中膝栗毛・五編上)

○「コレハ河四郎さん、有がたふございます。」
(東海道中膝栗毛・八編下)

(東海道中膝栗毛・八編下)

尚、このお礼の言葉の中には、語尾の部分省略した例がある。また、語頭に敬讓の意を表す接頭語の「お」をつける場合もある。(注6)しかし、これまたいづれも左記の例のように、カタジケナシ、アリガタシの両方に出て来ている。

○「かたじけ。」
(狂言・三人がたは)

(狂言・三人がたは)

○「とんと梅が枝もどき。ありがく。」
(黄表紙・金々先生栄花夢)

(黄表紙・金々先生栄花夢)

○「ハイおかたじけなふござります。」
(東海道中膝栗毛・六編下)

(東海道中膝栗毛・六編下)

○「ははは、お有がたふ御座りんす。」
(洒落本・遊子方言)

(洒落本・遊子方言)

以上、「ありがたい、うれしい」の場合でも、カタジ

ケナシとアリガタシとの間に用法上それほど差違はなかったことになる。とすると、この意味の場合、カタジケナシとアリガタシはどのように使い分けられていたのであろうか。

ここでまず考えてみたいのが、使用量の問題である。すなわち、先掲の表でもわかるように、「ありがたい、うれしい」の意味のカタジケナシは、時代が下るにつれて量が少しずつ減少して来る。反対にアリガタシは、時代と共に増加傾向にあり、特に近世も末期になると、数の上で断然カタジケナシを圧倒する。例えば、「江戸生艶氣禪焼」「敵討義女英」などの黄表紙ではカタジケナシの例こそないが、アリガタシは一一例、「東海道中膝栗毛」ではカタジケナシ六例に対してアリガタシが四七例、「浮世床」ではカタジケナシ一例に対してアリガタシが一二例と、いずれもアリガタシの方がカタジケナシに比して一〇倍ほど多く使われている。これはつまり、カタジケナシ、アリガタシという二つの形容詞の用法が現代のそれに近い近づいて来ていることを物語っていることになる。

もう一つ、カタジケナシとアリガタシに相違があると認められるのは、いわゆる敬意度の問題である。すなわち、この二つがそれぞれどんな場合に用いられているか

ということであるが、用例を見ると、人の行為が自分の身に及ぼした影響について「ありがたい、うれしい」と述べている場合が非常に多い。そして、その人はというと、それはほとんど目上の者に限られる。ただし、アリガタシの場合は、必ずしも目上の者ばかりというわけでもないようである。例えば、謡曲を見ると、童子↓勅使（岩船）、鶴飼の老人↓清澄の僧（鶴飼）、小野小町↓帝（鸚鵡小町）など目上の者に対してアリガタシを用いる例もあるが、中には、重盛↓清盛（重盛）、勅使↓老人（源太夫）、東光坊祐慶↓老女（安達原）など、相手が目上の者とは考えにくい例も出て来る。一方、カタジケナシはほとんど例外なく目上の者を対象としている。虎明本狂言の中にカタジケナシが圧倒的に多いのは、目上の人である主人に対する太郎冠者や次郎冠者のお礼の言葉として、カタジケナシが使用されているからである。太郎冠者達は主人の命令に対しては、「畏ってござる」と述べることが多い。この言葉からも、これら従者達が主人には特別の畏怖、畏敬の念を抱いていたことがうかがわれる。先述したように、このカタジケナシが一五〇年後に成った虎寛本ではアリガタシに代わっているが、それは、作品としての特色もさることながら、お礼の言葉アリガタシがこの頃にはかなり普及していたこと

を物語っているものと思われる。

アリガタシは元々江戸で使用していた感謝の言葉で、それがやがて上方に移入されて、初めは遊里の徒・粋人の間で行われていたが、後しだいに一般化したという。（注7）よって、江戸言葉で書かれた「東海道中膝栗毛」や「浮世床」などにアリガタシの例が多いのも納得が行く。要するに、江戸時代も中期以降になると、カタジケナシを駆逐したアリガタシが、お礼の言葉として多用されるようになったということであろう。

結局、敬意度の面で見ると、その用例から推して、アリガタシよりもカタジケナシの方が強かったのではないかと思われる。つまり、より改まった丁寧な言い方の中にはカタジケナシの方を用いたもののようなのだ。「東海道中膝栗毛」の中で、主人公の弥治郎兵衛と喜多八が「一札之事」として書いた証文に、左の通り、アリガタシではなく、カタジケナシを用いているのなどその証拠といえよう。

○預御腹立無申訳段々誤入候所、御了簡被下忝存候。

（東海道中膝栗毛・七編下）

ところで、右のようなカタジケナシとアリガタシの用法は現在のそれと何ら変わりが無い。つまり、使用量や敬意度の面などから推して、この二つの形容詞は、近世

後半には既に、現代の用法とほとんど同じように使われていたということになる。

以上、カタジケナシとアリカタシについて、さまざまな角度から考察を加えて来たが、お互いに似た言葉ではありながら、微妙な使い分けの存していたこと、見て来た通りである。また、左のように、いくつかの作品でカタジケナシとアリガタシが続けて用いられている例があるが、これなども、この二つが決して同義ではなかった旨裏づけていることになる。

○さてもざいに人のみくにはかたじけなくありがたき御ことばかな。(こんてむつすむん地・第四)

○「内裏様の国なればこそ。余所でなる事か」と有難くかたじけなし。(好色一代男・巻八)

○ア、かたじけなしありがたしと伊左エ門タぎりもろともに手をあはせてふしおがむ。(洒落本・錦之裏)

○有がたいかたじけないと礼いふていっばいたべて酒の御ちそう。(東海道中膝栗毛・三編上)

さて、今号では、形容詞カタジケナシについて、より深く掘り下げるため、最も近似している語と目される形容詞アリガタシを取り挙げて比較考察を行った。そして

これら両語が、量的にもよく使われ、意味的にもいちばん接近しているのは、中世末から近世にかけてと思われたので、この時代に焦点をあててながめて来た。

したがって、今回の場合、まことに心苦しい次第であるが、この小誌の誌名「上代文学研究」とは、かなりかけ離れてしまった点、お許し載きたい。来号では、カタジケナシの語源について探り、この小稿をまとめようと思っている。以上、くどくどと述べて来たが、大方のご批判を仰ぎつつ、この辺で筆をおくことにしたい。

へ注1へ「学習院大学上代文学研究」第11、13号参照

へ注2へ作品の底本は左に記すものを除いてすべて日本古典文学大系本(岩波書店)を用いた。尚、索引のないものは一回だけの調査による。○申楽談儀他―「世阿弥伝書用語索引」中村格編、笠間書院、昭和六十年四月三十日。○高砂他―「謡曲二百五十番集」、赤尾照文堂。○史記抄、四河入海―「抄物資料集成」全七卷、岡見正雄、大塚光信、清文堂、昭和四十六年七月二十日。○閑吟集―新潮日本古典集成。○中華若木詩抄―笠間書院刊索引。○ドチリナ・キリシタン、インボのハブラス―朝日古典全書。○ばうちずもの授けや

十二年八月五日

う、おらしよの翻訳―笠間書院刊本文及び総索引、
理慶尼の記―和泉書院刊本文と総索引、○三河物語―
「原本三河物語」研究・釋文篇、中田祝夫編、勉誠社、
昭和四十五年九月五日、○醒睡笑―関口和夫編、桜楓
社、昭和五十六年十二月十五日、○夷大黒他―「大蔵
虎明本狂言集」総索引および本文、池田廣司、北原保
雄編、表現社、昭和五十七年十月三十日、昭和六十一年
五月三十日、○遊子方言他―大系本「黄表紙・洒落
本集」から洒落本六作品、○敵討義女英他―大系本
黄表紙・洒落本集」の中の黄表紙五作品

〈注3〉狂言集のカタジケナシ、アリガタシについては
左の論文に詳しくだいが参考とさせて戴いた。

大蔵流狂言に見えるお礼のことば「有難い」と「忝い」
について、「国語学」67集 柳田征司

〈注4〉この意味が出て来る作品数は三つだけだったの
で表には載せていない。よって、これら三作品では上
の三つの意味を足したものと合計数が違っている。

〈注5〉注3参照

〈注6〉「江戸言葉の研究」、湯澤幸吉郎、明治書院、
二八八ページ、尚、私の調査ではこの種の語は洒落本
に多かった。

〈注7〉「近世上方語辞典」、前田勇、東京堂、昭和六